

壁を越える

「こうでなければならない」と思っている人は

現実でつまづくと イライラしては文句を言う

逆に

「こうしたい」とだけ望んでいる人は

「じゃあ、他にどんな手があるだろう?」と考えて

絶えず行動し続ける

「執着する人」は

文句を言つて行動しないが

「欲求する人」は

文句を言わずに行動だけを積み重ねるのだ

「執着する人」というのは

「往生際」が悪いのだ

「今まで通りの方法」では

役に立たないとわかつていながら

そのことをなかなか認められない

逆に 「欲求する人」というのは
「諦め」が悪いところがある

なぜなら 彼はいつも

「まだ何か手が在るはずだ」と言つて

「次の行動」を取り続けるからだ

ただ

「諦めないこと」は

必ずしも「執着すること」を意味しない

むしろ

人は本当に「諦め」が悪くなつた時

「自分の限界」を超えていくものだ

逆に

「ここはもう行き止まりだ」と思い込んで

そのまま そこで泣いている人は

何も変えられないだろう

その時 「諦めの悪い人」 は

そこにブルドーザーで乗り込んできて

「壁」 ごとぶち壊すことがある

泣いていた人も

きつとビックリして泣き止んでしまうに違いない

「行き止まり」など

本当は存在していない

なぜなら

そこに「壁」を作ったのは自分自身だからだ

だから

「壁」をどこまでも越えていけ

「限界」を自分で決めることなく

泥臭くもがき続けるのだ

そうやつて

「諦めの悪い生き方」をすることで

あなたの周りを取り囲む「壁」は

全て破壊されていくだろう

あなたを縛るのは

いつだって あなた自身であり

あなたを自由にできるのも

あなただけだ

あなたを閉じ込める「壁」を壊せ

あなたには必ず

それができる

なぜなら

その「壁」を作ったのは

他でもない　あなた自身なのだから

我慢

「我慢」は

たつたの1ミリも必要ではない

必要なのは「自発性」だ

「嫌だけどやらないといけない」

「本当はこんなことしたくない」

そう思っている人だけが「我慢」をする

だが もし「自分の内側」に動機があるなら

その人は苦労を苦労と思わなくなる

その時

当人は苦労することの中にさえ

清々しい「快」を感じることだろう

だが

世間では「我慢すること」が尊ばれる

なぜなら

「我慢している人」は支配しやすいからだ

「我慢している人」は

「自分自身」を捨ててている

実際

「我慢」してさえいるならば

「面倒ごと」と無縁でいられるだろう

だが

それによつて当人は

「自分の人生」を生き損なつてしまふ

そもそも

人生というのは「面倒」なものだ

そこに「トラブル」はつきものであり

未来を予測することは誰にもできない

そして

その「生の不確実さ」を恐れる人は

「我慢」の中に閉じこもる

自分を閉ざして

「嵐」が過ぎ去るのを待とうとするのだ

だが

その「嵐」こそが人生だ

あなたが生きている限り

「嵐」が止むことはないだろう

だから

もしも「嵐」が過ぎ去るのを待とうとすると

その人は死ぬまで「我慢」し続けることになる

しかし

あなたはそれでいいのだろうか？

もし　自分自身から自発的に動くなら

「我慢」は一切必要なくなる

あなたは「我慢」を感じることなく

困難に自分から面と向かう

あなたの内側に在る

「もっと生きたい」と願う炎が

「我慢」という氷を解かし

あなたのことを「自由」にする

もちろん そこには

「人生」という名の「面倒ごと」が待っているが

あなたはきっと それを楽しみ始めるだろう

そうなつて初めて

「人生」というものの味がわかる

弱さ

「これが～学の入門書！」

という文言を見る度 疑問に思う

どうして人々はそんなにも

「新しい松葉づえ」が欲しいのだろう？

「体系化された学問」を市井の一般人が学んでも
「余計な荷物」を背負いこむことにしかならない

それによつて余計「不自由」になるだけなのに
なぜそれがわからないのだろうか？

もちろん 私にはわかっている

人々は不安で仕方ないのだ

「人生は不確実である」ということが

どうしても受け入れられないのだ

だから

何かを学んで「わかつたつもり」になりたいのだ

それによつて

「自分の足場」を補強せざにはいられないのだろう

だが 「生」 はいつも

そんな風に私たちが必死になつて築いた「足場」を

易々と流し去つていく

だから

誰もが不安で震えている

何によつて立てばいいかがわからないからだ

そして

多くの人は

「自分は人生を恐れている」と認めない

代わりに

学問を学んだり知識人に質問したりして

藁くずのような「知識」で自分のことを守ろうとする

なぜなら

「自分は人生に対して全くの無知だ」と

気づいてしまうのが怖いからだ

これからも

「学問の入門書」は書かれ続けるだろうし

多くの人がそれを買うだろう

「人の恐れ」がそれを促す

「心の弱さ」がそれを許す